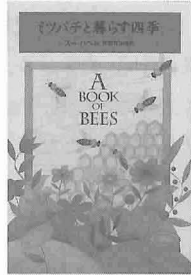


## 参 考 図 書 紹 介

### ミツバチを飼う楽しみ

スー・ハベル (片岡真由美訳). 1999. ミツバチと暮らす四季. 晶文社, 238pp. 本体 2300 円 ISBN 4-7949-6400-5



新刊書情報でタイトルを見たとき、これがミツバチの関連書籍かどうかかわからず、出版元の晶文社から譲り受けた1冊を手にしても果たしてこの欄で紹介すべきかどうか迷った。そこで読み進めるのと同時に、著者のスー・ハベルについての情報も集めた。

彼女の新作“Waiting for Aphrodite”（メイン州の海岸に移り住んでから書き綴った海の小さな生き物に関するエッセー）の書評は科学雑誌 Nature にも掲載され、この時初めてハベルの名前を知った。彼女はミズーリ州オザークで養蜂を営みながらミツバチやガーデニングに関するエッセーを New Yorker 誌などに連載して好評を博してきた。センチメンタルに田舎生活を伝えることで都会生活者の渇いた心を癒そうという試みを成功させ、本書もアメリカではいわゆるヤッピーと呼ばれるような都市住民に人気がある（今号の巻頭記事を寄せていただいた Summers 夫妻によれば養蜂家はどちらかというと冷ややかに受けとめているとのこと）。

原書のタイトルは“A Book of Bees: And How to Keep Them”と、まるでミツバチ飼

法の本だが、残念ながら期待はずれる。日本の読者にとってはアメリカの養蜂の実態を垣間見るだけでも興味深い。内容は読み進むに連れておもしろさを増す。邦題の通り、ミツバチの四季をテーマにしているが、四季を秋から始める奇抜さは、春から夏を最大の盛り上がりとするミツバチ中心の生活を描く上では心憎い構成だ。そのミツバチの四季の移り変わりに一連の養蜂作業がリズムをつける。彼女がミツバチの異変に気づくくだりが随所にあって、それにどう対処したのか、異変への彼女の感覚の動きと、その後の行動を読みとるのはなかなか楽しい。ミツバチを飼うための指南書にはならないが、ミツバチを飼う楽しみが容易に伝わる。

ミツバチへの時にクールで時に熱烈な思い入れや、挿入される詩文には趣味が分かれることだろうし、田舎に移り住んだ中年女性の自意識過剰が気にさわるかも知れない。また惜しいのはミツバチ関連の用語の翻訳・解釈に難（数多くの文献を引用している割に散見される著者自身の誤解に由来するものもある）があること、道具類はそれらしいのに巣の中を描いたイラストはとても満足のいくものではないこと。もっともこうした欠陥はミツバチを扱ったことがあれば補って読めるだろうから、ミツバチの四季を味わう妨げにはならない。この秋から読み始めるには手軽な一冊である。（中村 純）

### Farming Japan: アジアと熱帯の養蜂特集号

Farming Japan 誌は農林水産業に関する英文誌で、内外の農業事情、技術情報、研究成果を掲載し、隔月で刊行されている（Farming Japan 社発行）。国際協力事業団が関係先に配布するなどして世界各地に読者を持つ国際誌でもある。33 巻 3 号（1999）は標記の特集号としてミツバチ科学研究施設関係者などによる関連記事が掲載された。アジアのミツバチと養蜂育

（吉田）、アジアの養蜂の問題点（中村）、トウヨウミツバチの生態学的特徴と養蜂種としての可能性（佐々木）、日本の養蜂生産物（松香）、熱帯養蜂と関係機関（Wongsiri, 松香）。

（中村 純）

